

作詞少女

日向 仰木

番外編

はじめての詞先作詞



2019 COMITIA 129 頒布予定本

「お待ちしてりました、悠さん」

「え……？」

詩文がアメリカに旅立ってから2週間ほど経った、ある春の日。高校三年生になった私は、引き続き尚子のバンド『ざ☆ぐつどたいみんぐ』の曲に歌詞を書いていた。

しかしそこで私は、一つの問題に直面する。それは、尚子からの『詞先で歌詞書いてほしい』という注文だった。

『詞先』っていうのは、メロディより先に歌詞を書いて、そこにメロディを付けるといふ曲作りのスタイル。詩文から教わった作詞のテクニクは基本的にメロディありきのことだったから、私はこの詞先というスタイルでの作詞をどうすればいいのかわからず、ここ数日悩んでいた。

「お待ちって……突然訪問してすみません………つて言おうと思っただけ………待つてたんです

か？ 私を？」

「はい。あなたを待っていましたよ、悠さん」

「……？」

そして私は、そもそも詩文に作詞を教えた人は誰なのかを考えた。もちろんそれは、詩文を育てた詩文のお父さんに違いない（詩文はお父さんのことを凄まじく嫌っていたようだけ）。この方ならもしかしたら、私の悩みにいいアドバイスをくれるかもしれない、と思つて、アポもなく（連絡先わからなかつたし）久しぶりに伊佐坂邸にやつてきたただけ……。

私を出迎えたのは、一度会つたことがある家政婦の芳子さん。相変わらずおっとりとした様子のいかにも着物の似合う素敵なおばさん。どういうわけか、私を待つていたらしい。

「うふふ♪実はね？ 詩文ちゃんから言われていたんですよ。『遠からず、この前の友達がここを

訪ねてくるだろうから、相手をしてやってくれ。あと、親父には絶対に会わせるな」とのことです。

「詩文が……？」

「どうやら、詩文は私の行動を読んで事前に芳子さんにそのことを伝えていたらしい。……なんか、くやしいわね。まんまと詩文の予想通りの行動をしちゃつてるとは。」

「悠さんの御用はきつと旦那様になんてしょうけれど、すいませんね。詩文ちゃんも等しく私の主人なので、言いつけは守らなくてはいいけません」

「……そうなんですか。はい。用件は、詩文のお父さんに作詞について教えていただきたいっていうことだったんですけど。」

「……ひとまず、立ち話もなんですし、せっかく来てくださったんですからあがつてくださいいな。詩文ちゃんの部屋でおもてなしするように言われていますので。」

「え、あ……はい。ありがとうございます」

~~*~*~*~*~*

あの時とは違って、生活感なく綺麗に片付けられた詩文の部屋。いま詩文は日本にいないんだなっということを、改めて感じさせるような。いつ詩文が帰ってきてもいいように、という感じであらゆるものがキチンと整頓してあって、掃除もくまなく行き届いている。きつと、芳子さんが手入れをしているのね。

「悠さんがここに来たのは4ヶ月前くらいでしたっけね、ハイこちら、お茶とお茶菓子になります。ちようど京都のおいしいところのお菓子を貰ったところだったんですよ」

「ありがとうございます。そうですね、4ヶ月……もつと前に感じますけど、それくらいだったん

ですね」

「詩文ちゃんの言伝でね、悠さんの疑問には私が答えるよう仰せつかつています。私では役者不足かもしれないけれど、悠さんの聞きたいこと、教えてくださらない？」

「え、あの……でも、作詞に関することなんですが」

「……うふふ。私も伊佐坂に仕える者ですから。作詞も作曲も嗜んでおります。旦那様の教えも、詩文ちゃんのお教えも、両方聞いていますよ。二人の言葉のおうむ返しですが、それでよければお答えします」

クスクスと笑う穏やかな芳子さんは、一瞬、詩文が見せるような不敵な目をしたように見えた。

——伊佐坂の者。この家がどういう家なのかはいまだにちよつと正体不明だけど、ただの音楽家系っていうわけでもなさそう。芳子さんは明らかに、何か出来る人のようだった。

「では……詞先作詞についてを知りたいんです。どうやればいいのかわからなくて」

「詞先作詞……なるほど、詞先ね」

詩文の部屋に座布団を敷いて、向かい合わせに座る私達。芳子さんは少し思案したあと、ポツリと言った。

「詞先は、作詞の中でも極めて難しく、ある意味では、それが出来る人こそが真に作詞家だと言っても過言ではないものかもしれませんね」

「そうなんですか？」

……またずいぶん、大げさなことを言うようにも思う。こういうところも含めて、まさに伊佐坂の者、なのかもしれない。

「作詞は『音楽語の翻訳』だという話は、詩文ちゃんから聞きましたか？」

「はい。それはかなり大事な話でしたね」

「そうですね。だとすると詞先作詞は、何をする事なんだと思いますか？」

「……………」
 あくまで、答えを教えるわけではなく思考することを促してくる。このあたりも、詩文的な感じがする。

「……そうですね……詞先だと……音楽語を……間接的に日本語でゼロから書く……ですか？」

そういうことになる。メロディ……つまり翻訳対象の音楽語が用意されていない場合は、歌詞でその音楽語を書くしかない。音楽語というか、音楽語を引きださせる日本語……かしら？

「そういうことですね。だとすると、何が必要になるんだと思いますか？」

「何が必要……」

音楽語に逆翻訳できるような日本語の歌詞。そこに必要になるのは、やつぱり……。

「音楽語を深く理解すること、だと思います」

「そう。その通りですよ悠さん」

ニッコリと微笑んだ芳子さんは、続けて言う。

「詞先作詞に必要なのは、作曲能力です」

やつぱりそうなるのか。薄々気づいてはいたけど、ここでいよいよ避けようなく作曲が出てくる。

「……つまりこういうことですね。詞先作詞をするにあたっては、むしろ自分で一曲、仮の作曲をしてそれに歌詞をつけるという工程を踏む、そういうことですか？」

「御明察です。そのとおり。さすが詩文ちゃんの門弟ですね」

「いえ、易しい導きだったので、きつと私じゃなくともわかることでした」

門弟、なんて言われるとなんとなく気恥ずかしい。あいつとは友達でいて、師弟でもある。師弟だなんて意識したことはそれほどないようにも思うけど、実質でいうなら私は間違いなく詩文の門弟ね。たしかに。

「別にね、作曲の達人にならなければいけないと

いうことではないんですよ、悠さん。詞先作詞をする上において、最低限のリズムを纏わせるために、仮想作曲というのには必要になるのです」

「最低限のリズム……?」

「ええ。文章と歌詞は違いますから。歌詞には必ず、美しいリズムがあります。古くは都々逸、川柳なんかも日本語歌詞のルーツですね。言葉の持つ美しいリズムを導き出すには、やはり音楽的ではなくては」

「どいっ……?」

「三味線音楽の一つですよ。七七七五のリズムでひとくさりの音楽です。有名な一節では『三千世界の カラスを殺し ヌシと朝寝が してみたい』などですね。聞いたことありませんか?」

「……聞いたことないですね」

「ええ。興味が沸いたら、調べてみるのもいいかも知れないに思ってもらえれば」

「詩文は、そういうのも知ってるんですよ」

「知っているどころか、詩文ちゃんも師範ですからね。10歳の頃には数え切れないほど、もう目

についたものの全部を都々逸にしてみましたね」

「……なるほど」

なんでも出来るやつだとは思ってたけど、三味線まで弾けるのね。それに、その都々逸?とかっていうのも極めてるとは。つくづく、あんたホント何者なのよ。

「日本語のリズムというものは、諸外国の言語と比べてもなかなか異質です。流線型のイントネーションのフランス語や英語、中国語といったものと比べて、日本語はポツポツと、拍が独特の趣を持っています。それこそ、まだ日本が西洋と馴染みの薄かった頃、『かの黄金の国ジパングの言葉はさぞ美しいものだろう』と想像していた西洋人が、実際の日本語を聞いてポツポツとしたその素朴な響きに大いに驚いたという逸話もあります」

「日本語ってそんなに独特なんですか?」

「独特といえば世界中の言語が独特です。ユニークとはそういうものですから。そして、国籍のな

い音楽語もまた独特。その両方をわかった上で、さて、この気持ちをあいまいに旋律にのせるにはどうすればいいか、日本語と音楽語のその中間をどう射抜くかというのが、作詞妙技の試されるところというわけですよ」

「そういうこと……なのかもしれませんね」

なんなのこの人。……ああ、なるほど。伊佐坂の者って、詩文に限らずみんなこういうことを修得してるっていうことなのかしら。

「あら、いやですよお悠さん、うふふ♪私の言葉はどれも、旦那様と詩文ちゃん言葉のおうむ返しですから。私が何か知っているわけではないんですよ」

「あ、はあ」

いや、だから、そんな風にいま私が考えてることを察してコメントしてる感じも含めて、詩文っぽいと思ってるんだけど。

「と、改めていいますとね、詞先作詞をするならやはり作曲は必要だと私は思いますよ悠さん。演奏でもかまわないでしょうけれど、一番直接的なのは作曲だと私は思います。演奏行為は『用意された言葉を美しく語りあげる』こと、作曲行為は『言葉を操り、綴ること』です。演奏だけでも音楽語の習得は可能だと、もしかしたら詩文ちゃん……優しい子だからそう言ったかもしれませんがけれど、やっぱり、台本を読むのと脚本を書くのでは、言語の習熟度は違います。真に作詞をするのなら、作曲を避けるのはやはり不自然です」

「……そうですね」

詩文がいつかした話を、まるで聞いていたかのような芳子さんの言葉。私より長く詩文と付き合っているらしいその様子は、なんとなく私には嬉しいものだった。詩文の話が出来る相手って、他にいないし。

「……詩文なら、なんて言うでしょうね」

「もう、言われたんじゃありませんか？」

「言われましたね。よく覚えています。『だったら作曲をまじろよ。誰もハッキリ言わねえんだ、こんなに大事なことを』みたいな言葉で」

「うっふ、詩文ちゃんが言いそうな言葉ですね」

「でも、難しいですね。作曲は……実はやってみようとはしたんです。けど……どの本を読んでもやっぱり難しくくて……曲を一曲仕上げるのって、並大抵のことじゃないですね。私はもともと音楽をやってたわけでもないし、楽譜の読み方もわからない私が、曲を仕上げるっていうのは……ちょっと、手に負えなくて。どうしようかと」

私の言葉を聞きつつ芳子さんは、ちよつと失礼、と言いながら正面においてあるお茶菓子をひと摘み食べる。そしてお茶を一口飲んで、喉を潤しつつ、言った。

「……悠さん、作曲できるようになりたいですか？」

「もちろんです。だから頑張っているんですが……」

「だったら、お教えしましょうか」

「え……？」

芳子さんは、穏やかな面持ちで優しくいう。どういうわけか懐かしさのあるこの受け答えに私は、惹きつけられるように返事した。

「よろしくお願いします。教えてください」

「かしこまりました」

「……伊佐坂家のやり方を教えてくれる、ということですよ？ あ、もちろん、レッスン代とかはバイトして払います」

「いいえ、これは詩文ちゃんの言いつけですから、お代は頂けません。詩文ちゃんに代わって、私が知っている限りのことだけお教えします。もつとも、私では役者不足ですけど、それでもいいかしら、悠さん」

「……役者不足だなんて、とんでもないです。でも、タダでというわけには……」

「気になるかしら……でも、困ったわね。……

あ！ そうそう、そういえばね、大事なことを忘れていたわ！ こつちに来て悠さん♪」

「え、はい……？」

手をパンと叩いて嬉しそうに何かを思い出した芳子さんは、私を伊佐坂家の庭に連れ出す。そして、灰色のビニールに包まれた大きなモノの前に移動した。

「この子、詩文ちゃんから悠さんに。『アタシが帰るまでお前が世話をしよってくれ』って」

そう言うと芳子さんは、よいしょと言いながらビニールをめくる。そこにあつたのは、いつか詩文が乗せてくれた真っ赤なバイク——ブンブン丸だった。

「これ……詩文の大事なバイクじゃないですか」

「ええ。車両の登録やなんかのことは私がすべてやります。もし預かってくれるなら、このバイク、乗ってくださらない？」

「でも私、バイクの免許とか……いや、なんでもないです。はい。乗ります。私が預かりたいです」

「よかつたあ！ だったら、レックス代のかわりは『このバイクを預かること』っていうことでちようどいいわね♪」

「はい。私にとつてはどちらも有難いことですけど……わかりました。大事に預かります」

バイクの免許とか、とればいいわね。

嬉しそうに詩文のバイクを撫でている芳子さんの様子を見つつ。詩文が大事にしているものは全部大事だとも言いたげな芳子さんは、きつとそういう理由で私への対応も手厚くしてくれているんだろうと思う。

どうしても突破が難しいと思っていた作詞へのもう一步先——『作曲について』をいよいよ知る時がきたのかもしれないと思いつつ、私も懐かしさを覚えながら詩文のバイクに触れた。

……いまはどこで、何をしているのかしらね。

あとがき

こんにちは、仰木です。今回のCOMITIA129では新作小説『トークバック』の2巻を出すつもりだったのですが、諸々のスケジュールの事情で印刷が間に合いませんでした。前回もこれと同じあとがきを書いた覚えがありますが…同作を目当てに来て下さった方におかれましては、本当に申し訳ありません…。いま諸々の原稿を同時に書きつつではございますが、同書はライフワークとして書いてまいりますので（書かずにはいられない本でもありますので）、次回こそは必ずお持ちします！

さておき、今回の作詞少女 番外編コピ本は悠のその後のエピソードで、『詞先作詞』についてでした。詞先作詞については本編で触れようとしていたのですが、ページ数の関係で泣く泣くカットした部分だったりします。詩文のいなくなった日常での悠の作詞研鑽のワンシーンとして書きましたが、結果的にはこれがベストだったなと思います(´v`) 伊佐坂家と詩文の過去についてもいつか書きたいなと思いつつ、いまの詩文がアメリカで何をしているかも書きたいなとも思いつつ、そしてもう一つは、これから悠が飛び込んでいくフィールドについても書きたいな！……と、書きたいことはまだまだありますが順番がありますので、一つ一つしっかり書いていきたいと思えます。これからも作曲少女シリーズをよろしくお願いします♪